

■ 矢作川の河川環境の方向性について（H.25 年度検討）

1. 本川モデル 7・8 回で共有できたこと

目標：多様な物理環境と生物生息環境を目指すこと

- ① 動植物にとって、魚にとって、利用者（人）にとってなどの観点でブレークダウンして整理する必要がある。

目標の達成に向けて

- ① 瀬・淵・ワンドなど河川の現状について、微地形の時間の変化（攪乱頻度）、距離の変化の観点で把握する必要がある。
- ② 低水路幅の取り扱いが一つのキーポイントであり、白浜工区（順応的管理手法）の経過を観察し、低水路幅の拡幅後の河道の応答を確認していく。
- ③ 治水上の制約を前提として、矢作川の河川環境の多様性を保全・創出していくための解決策について検討していく。（②で得られた知見を今後実施される河道拡幅事業等に活用）
- ④ 上流の境界条件がわかれば、短期的な河床変動予測は可能である。（河床変動の長期的な予測は困難であること。）
- ⑤ 矢作川の河川環境を把握するための基礎調査（地形測量、粒径等）が必要であり、各管理者の協力が必要である。

2. 情報共有が必要なこと（まだわかっていないこと）

- ① 越戸ダムから流下してくる土砂の情報（供給量、粒度分布など）
⇒土砂管理検討委員会に依頼
- ② 土砂管理検討委員会で越戸ダム下流の環境をどう考えているかの情報。
⇒土砂管理検討委員会に依頼
- ③ 越戸ダムの堆積土砂の情報（粒度分布など）
⇒中部電力、国交省・愛知県に依頼（それでも難しい場合に WG で検討）
- ④ 国交省と愛知県が連携した継続的な調査の実施（河道横断測量、河床材料など）
⇒国交省と愛知県に依頼
- ⑤ 低水路幅拡幅による河道の応答 ⇒ 白浜工区をモニタリング